嘘・秘密論の問題構図

慶應義塾大学大学院　小田中悠

１　目的

嘘をつくこと，あるいは，秘密を作るという現象は，ジンメル（[1908] 1923=1994）による議論や，ゴフマンの諸研究に代表されるように，しばしば社会学的な研究のトピックとなっており，国内においても，嘘・秘密を主題とした研究がなされている（仲村・井上編 1982; 正村 1995）.

本報告では，そういった議論が嘘や秘密のどのような側面に着目し，それに対してどのような意味を与えてきたのかを整理する枠組みを提示し，嘘・秘密について論じることで何を問うことができるのかを明らかにすることを目指す.

２　方法

相互行為を営む人々の現実認識の様相という観点から，嘘・秘密論を検討していく．嘘や秘密がある場面では，両者のあいだで，異なる現実認識がなされていると考えられる．そこで，ジンメルらによる信頼論や，ゴフマン（[1974] 1986）のフレーム分析を参照することで，そのような場面を捉えていく．前者は，相互行為において，各人の現実認識の異なりを強調した上で，それぞれが各々の認識を間主観的なものとみなしている状態を信頼の成立として論じ（浜 1996），後者は，嘘や秘密がそうであるように，他者の現実認識を操作することを定式化しているからである.

３　結果

まず，嘘や秘密は，信頼の成立を前提とすることで生じる現象であることを示した．また，嘘や秘密が存在する場面の三類型を提示し，それに基づき，嘘・秘密論を整理した．すなわち，（１）他者の現実認識をそれまでとは異なるものに作りかえている，（２）他者の現実認識をそれまでと同様のものに維持している，（３）相互行為に参加する人々が協働して各々の現実認識を維持しているという三類型のいずれかについて論じたものとして，嘘・秘密論を扱いうることを示した．そして，たとえば，（１）に属する議論においては，嘘・秘密が，新たな秩序を創出する行為として捉えられており，（２）や（３）を対象とした議論においては，自己や，相互行為の秩序を守るものとして嘘や秘密が位置づけられているといえる.

４　結論

嘘や秘密を論じることは，相互行為の秩序のあり方を問うていくことにつながるだろう．本報告が依拠した信頼概念は，その成立というレベルでの相互行為における秩序と結びつけて論じられているものである．他方で，嘘・秘密に関する議論は，信頼論とは異なる立場から相互行為の秩序を論じてきたものだといえる．したがって，相互行為における二つの秩序の結節点として，嘘・秘密論を扱いうることが示唆される.

文献

Goffman, E., [1974] 1986, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Chicago: Northeastern.

浜日出夫，1996,「もうひとつの秩序問題――ジンメルからガーフィンケルへ」『社会学史研究』18: 27-37.

仲村祥一・井上俊編，1982,『うその社会心理――人間文化に根ざすもの』有斐閣.

正村俊之，1995,『秘密と恥――日本社会のコミュニケーション構造』勁草書房.

Simmel, G., [1908] 1923, *Soziologie：Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Berlin: Duncker & Humblot.（=1994，居安正訳『社会学』白水社.）